



体感型伝統的工芸品展示会

伝統的工芸品

in 春日部 2012

関東・甲信越の逸品が一堂に



東部地域振興
ふれあい拠点施設 ふれあいキューブ 多目的ホール

11/9_金 10_土 11_日

10時～17時(最終日16時まで)

主催：伝統的工芸品 in 春日部実行委員会

伝承の技と美



今年が2回目の「伝統的工芸品 in 春日部」の開催となりました。昨年は開催3日間で29,000人と多くの皆様方にご来場いただき、日本人が長年にわたり大切にしてきた人と人とのつながり、心と心とのつながり、人とモノとのつながり、そうした中で生まれてきた各地域の伝統的工芸品の素晴らしさを楽しんでいただけたのではないのでしょうか。

私たち伝統的工芸品に携わる職人達は、100年以上にわたる技術や技法を師匠から弟子へと伝承を重ねて、日本人にあった品物を長年にわたり多くの人々に提供してまいりました。

今回も、関東甲信越と岩手の1都10県、21の伝統的工芸品の指定産地が連携して、皆様に工芸品を通して日本で100年以上受け継がれてきた伝統的技法・技術の素晴らしさ、伝統的工芸品のもつ美しさを知っていただきたいと思っています。

昨年のテーマは「絆」でしたが、今年は力強く復興を進めていくための「連帯と連携」をテーマにしていきたいと思います。会期中には人間国宝で春日部市在住の増村紀一郎先生（漆芸家）

のご講演や、職人達による産地紹介・技術紹介なども予定しており、昨年にも増して伝統的工芸品を知っていただく機会を設けてまいりたいと存じます。ご来場いただきました皆様と職人達との連帯、各産地の連携など、さまざまな出会いを楽しんでいただければ幸いです。

また今回の会場も、埼玉県春日部市の「ふれあいキューブ・多目的ホール」です。この会場において、関東周辺の伝統的工芸品の展示や製作実演などを通じ、作り手や使い手との交流の機会を設け、多くの皆様にもものづくりの奥行き、深さ、楽しさ等を体験していただき、伝統的工芸品の良さを知っていただきたいと思っています。

ご来場の皆様には、数々の伝統的工芸品をじっくりとご覧いただき、また製作実演や製作体験なども通じ、本物のもつ魅力を感じていただければ幸いです。

平成24年11月

伝統的工芸品 in 春日部 実行委員会

実行委員長 島田 利雄

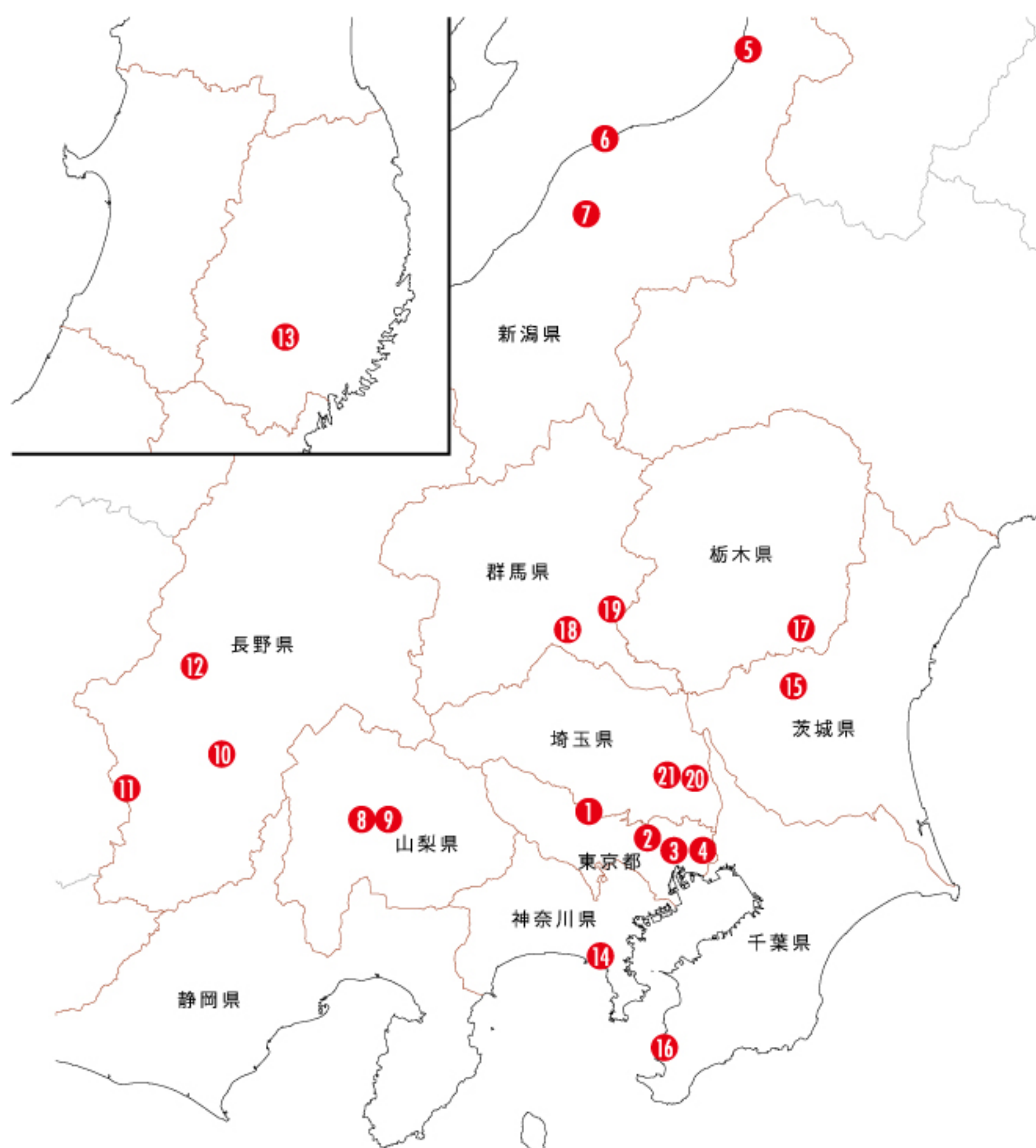
関東甲信越より 21産地 21品目が勢揃い

東京都

- ① 村山大島紬
- ② 東京手描友禅
- ③ 江戸木版画
- ④ 江戸切子
- 新潟県
- ⑤ 村上木彫堆朱
- ⑥ 新潟漆器
- ⑦ 越後三条打刃物
- 山梨県
- ⑧ 甲州手彫印章
- ⑨ 甲州印伝
- 長野県
- ⑩ 信州紬
- ⑪ 南木曽ろくろ細工
- ⑫ 木曽漆器

岩手県

- ⑬ 南部鉄器
- 神奈川県
- ⑭ 鎌倉彫
- 茨城県
- ⑮ 真壁石燈籠
- 千葉県
- ⑯ 房州うちわ
- 栃木県
- ⑰ 益子焼
- 群馬県
- ⑱ 伊勢崎緋
- ⑲ 桐生織
- 埼玉県
- ⑳ 春日部桐箆笥
- ㉑ 岩槻人形



春日部桐箆笥

主な産地：埼玉県

【産地組合】春日部桐たんす組合／埼玉県春日部市中央1-8-14 TEL:048-761-2213



【歴史】

春日部桐箆笥の起りは江戸の初期、日光東照宮造営に集められた工匠達の一部が桐の樹木が多く繁茂していた、宿場町春日部に残り、桐の細工物を作り始めたのが、桐箆笥の起りと言われています。すでに1700年代には小規模ながら産地を形成していた旨の史料(公用鑑上や裏書のある桐箆笥)が発見されています。

【特徴】

江戸の昔から、質実剛健な武士文化に育まれて来ただけに、無駄な飾りを廃した地味で質素な外観と、直線を基調にしたデザインが特徴です。



村山大島紬

主な産地：東京都

【産地組合】村山織物協同組合／東京都武蔵村山市本町2-2-1 TEL:042-560-0031



【歴史】

村山大島紬の始まりは、江戸時代後期と言われています。1920年頃、正藍染め(しょうあいぞめ)による綿織物の「村山紺紬」と玉蘭による絹織物の「砂川太織(ふとり)」の2つが合流して、絹織物としての村山大島紬が生産の中心となりました。この素晴らしい品質や丈夫さが高く評価され、東京都指定無形文化財として認められています。

【特徴】

板締め注入染色法という独特な技術を用いた糸で織られています。表裏のないとても精緻なすり模様が特徴の手織りによる絹織物です。



東京手描友禅

主な産地：東京都

【産地組合】東京都工芸染色協同組合／東京都新宿区中落合3-21-6 TEL:03-3953-8843



【歴史】

江戸時代中期、武家政治の中心として文化や経済がともに栄えた江戸には、「くだりもの」と言われる関西方面からの産物が、たくさん集まってきました。こうした時代の流れにのって大名のおかかえ染師(そめし)等が多く江戸に移り住むようになり、各種の技法が伝えられました。町人が経済の主導権をにぎるようになるとともに、町人文化が発達して、粋やさびといった感覚が一般的になり、模様絵師による手描友禅が発展しました。

【特徴】

江戸は当時から現代まで、大消費地として洗練されたファッションが求められてきました。東京手描友禅は、そうした土地柄を背景に色数をおさえた粋なデザインを特色とし、地味な感じの中にも明るい色調と新しさのあるデザインを特徴としています。



江戸木版画

主な産地：東京都

【産地組合】東京伝統木版画工芸協同組合／東京都文京区水道2-4-19 TEL:03-3830-6780



【歴史】

江戸木版画は、墨一色の版画の上に色を筆で彩色していくようになり、これらは丹絵、紅絵、漆絵として進歩してきましたが、色を板木で摺る工夫がなされ、二、三色の色摺版画(紅摺絵)ができました。明和2年(1765年)には、金や銀まで摺り込み、中間色も木版で刷り上げることができるようになり、多色摺りのスタイルが確立されました。江戸木版画の製造の技術・技法は江戸時代に確立し、その技術・技法は改良を重ねながら発展して今日まで継承され、東京都を中心として伝統的に製造されています。

【特徴】

江戸庶民の生活に密着したもの、すなわち、庶民の暮らしを写し、喜びを刻み、夢や憧れを摺り上げたものが江戸木版画の特徴です。また、一組の版木から何百枚もの木版画が大量に製造されることも特徴です。



江戸切子

主な産地：東京都

【産地組合】東京カットグラス工業協同組合／東京都江東区亀戸2-9-6-101 TEL:03-3681-0961



【歴史】

天保5年(1834年)に、江戸の小伝馬町でビードロ屋を営んでいた加賀屋久兵衛という人物が、英国製のカットグラスを真似てガラスの表面に彫刻を施したのが始まりと言われています。明治時代には、英国人による技術指導によって、西洋式のカットや彫刻技法が導入されました。現代に至る精巧なカットの技法の多くはこの時に始まったとされています。

【特徴】

切子はガラスの表面に、金属製の円盤や砥石などを使い、さまざまな模様を切り出す技法です。かつては透明なガラス地にカットを施した「透き」が主流でしたが、近年では、透明なガラス地の表面に色ガラスの膜を被せカットした「色被せ(いろきせ)」が主流となっています。「色被せ」は、色地と透明部分のメリハリのあるカットに特徴があります。



村上木彫堆朱

主な産地：新潟県

【産地組合】村上堆朱事業協同組合／新潟県村上市松原町3-1-17 TEL:0254-53-1745



【歴史】

新潟県の村上地方は、平安時代から天然の漆の生産地として、広く知られています。村上木彫堆朱は、15世紀の初めに、京都の漆職人が中国の堆朱を真似て、木彫の上に漆を塗る技法として始め、その技法が村上地方で寺院を建てたときに伝えられたものです。最初に寺院を建てた宮大工が技術を覚え、江戸時代になると武士や町民の間に広まり今日に至りました。

【特徴】

木製木地に細かい彫刻をすることを得意とし、その彫刻をより引き立たせる漆塗りの技術が独特です。村上木彫堆朱は、堆朱(ついしゅ)、堆黒(ついこく)、朱溜塗り(しゅだめぬり)等6種類の技法の総称です。代表的な技法である堆朱は、朱の上塗りを艶消しで仕上げた、落ち着いた肌合いを特徴としています。



新潟漆器

主な産地：新潟県

【産地組合】新潟市漆器同業組合／新潟県新潟市西区小針藤山16-9 新潟樹脂産業(株)内 TEL:025-265-2968



【歴史】

江戸時代の初めに他の産地から漆塗り技術が伝わり、寛永15年(1638年)に現在の古町に碗店と呼ばれる塗り物の専売地域が定められて、保護政策がとられました。文政2年(1819年)の文書には塗師職人の名称を見ることができます。新潟は北前船の寄港地として物資や文化の集散地でしたので、漆器作りもさまざまな地方からの多彩な技法が発展しました。

【特徴】

花塗、石目塗、磯草塗、錦塗、竹塗などの多彩な塗りが特徴で、中でも竹塗は、下地の際に鏝で竹の節等を作り、その上に色漆で竹の肌や模様をつけるという他の産地では見られない塗りです。



越後三条打刃物

主な産地：新潟県

【産地組合】越後三条鍛冶集団／新潟県三条市元町11-53 三条鍛冶道場内 TEL:0256-34-8080



【歴史】

農業に必要な道具として、中世より「鎌」「鋏」等の製造を行い、閑散期の農家の副業として始まった「和釘」作りを経て、「包丁」「鉋」「鑿」「木鋏」「切出小刀」「鉋」など多くの種類の打刃物を作るようになりました。また、打刃物の製造に必要な道具「ヤットコ(鉄ハシ)」なども鍛冶職人が製造することができるなど、製品からその道具・用具まで一貫して作る技術・技法を現在まで継承しています。

【特徴】

使用分野ごとに特化した形状、材質を用い作られているため扱い易く、切れ味の持続性もあり、長期使用に耐える耐久性も兼ね備えています。



甲州手彫印章

主な産地：山梨県

【産地組合】山梨県印章店協同組合／山梨県甲府市大里422-1 武山堂 TEL:055-241-0001



【歴史】

江戸時代末期の「甲州買物独案内」には、甲府市内に御印版を扱う版木師の存在を示す記載があり、当時から既に職人が存在し、印章の商売を営んでいたことがわかります。同じ時期の別の文献には、極上草入六角(草等が混入した水晶で印材として珍重された)や水牛の印材の注文記載があり、当時から各種印材による印章が甲府市内で造られていたと判断できます。

【特徴】

水晶研磨術に含まれた水晶印材の製造と、印面に文字を彫る技術の発展は、ツゲ材、水牛材等にも及び、他県に見られない産業形態を構成しています。印材メーカー、印面彫刻業者、販売業者等、山梨県内にすべての業者が集まっており、現在も同様の形態で推移しています。



甲州印伝

主な産地：山梨県

【産地組合】甲府印伝商工業協同組合／甲府市川田アリア201 TEL:055-220-1660



【歴史】

江戸時代末期に、現在の山梨県の甲府市にあたる地域を中心にして産地が形成されました。江戸時代後期に書かれた「東海道中膝栗毛」という滑稽本の中には「腰に下げたる、印伝の巾着(きんちゃく)を出だし、見せる」といった記述があり、当時から甲州印伝が、財布や巾着等の袋物として人々の間で親しまれていたことがわかります。

【特徴】

漆模様付けされた、柔らかく丈夫で軽い鹿の皮で出来た袋物は、使い込むほど手に馴染み、愛着が増します。



信州紬

主な産地：長野県

【産地組合】長野県織物工業組合／長野県駒ヶ根市東町2-29 久保田織染工業株式会社内 TEL:0265-83-2202



【歴史】

信州紬の始まりは、奈良時代に織られていた「あしぎぬ」まで遡ります。江戸時代初期には、信州の各藩が競って奨励したことから、養蚕が盛んになり、信州全域が紬の織物産地として栄え、毎年京都へ大量の紬が送られていました。しかしその後紬織物の生産は下火になり、昭和の中頃までは、技術保存の名のもとに、わずかに続けられていたにすぎませんでした。戦後、県や市町村が紬織物の復興に力を入れたため、県下全域で生産が活発になり、高級な反物として、信州紬の名声も次第に高まりました。

【特徴】

主な商品は、着物用の「反物」と「帯地」の2つで、様々な色柄のものが生産されています。特に、100%山繭で作った山繭紬はここだけの特産品です。



南木曽ろくろ細工

主な産地：長野県

【産地組合】南木曽ろくろ工芸協同組合／長野県木曽郡南木曽町吾妻4689 TEL:0264-58-2434



【歴史】

南木曽町の古い文献によると、南木曽ろくろ細工の始まりは、18世紀前半となっています。盆、椀等の木地荷物を名古屋・大阪方面に出していたことが記されています。江戸時代中期には、白木の挽物（ひきもの）がこの地方で生産されていたことがうかがわれます。

【特徴】

南木曽ろくろ細工の良さは、天然の木目を生かして素朴で温かい手作りの良さを、木製品の隅々にまで感じさせるところにあります。十分に選びぬかれた天然木の本質、木の味等細かな変化に合わせて、製品が決められます。



木曽漆器

主な産地：長野県

【産地組合】木曽漆器工業協同組合／長野県塩尻市大字木曽平沢2272-7 TEL:0264-34-2113



【歴史】

始まりは17世紀の初頭です。もともと豊富な木曽のヒノキを使った木地作りが盛んな土地柄で、江戸時代に尾張徳川藩の手厚い庇護を受けて発達しました。木曽の漆器は中山道を通る旅人の土産物として人気がありました。明治時代初期に地元で下地作りに欠かせない「錆土（さびつち）」粘土が発見されたことから、他の産地より堅牢な漆器が作られるようになりました。

【特徴】

木肌の美しさを生かす「春慶塗（しゅんけいぬり）」、幾層もの漆によりまだら模様を表わす「堆朱（ついしゅ）」、彩漆（いろうるし）で幾何学模様を作り出す「塗り分け呂色塗（ぬりわけろいろぬり）」に特色があります。



南部鉄器

主な産地：岩手県

【産地組合】水沢鋳物工業協同組合／岩手県奥州市水沢区羽田町字明正131 TEL:0197-24-1551



【歴史】

17世紀初め南部藩が、盛岡に京都から茶釜職人を招いたのが始まりです。その後、各地から鋳物師、茶釜職人を南部藩に呼び寄せ、武器や茶釜、日用品を作らせました。有名な南部鉄瓶は18世紀になって茶釜を小ぶりにして改良したのが始まりで、手軽さから広く用いられるようになりました。一方、伊達藩（岩手県奥州市）でも、日用品の鋳物の生産が盛んで、明治時代以後は両産地の技術交流が進み、昭和30年代には盛岡と奥州両方の土地で作られた鋳物を総称して南部鉄器と呼ぶようになりました。

【特徴】

「質実剛健」「丈夫で長持ち」これが南部鉄器のイメージです。また茶の湯釜や鉄瓶に描かれている、様々な絵柄や美しく並んだ粒が描き出す「霰（あられ）」の文様は、作る人々の心の機微と温もりを感じさせてくれます。



鎌倉彫

主な産地：神奈川県

【産地組合】伝統鎌倉彫事業協同組合／神奈川県鎌倉市由比が浜3-4-7 TEL:0467-23-0154



【歴史】

鎌倉時代、中国から禅宗とともに多くの美術工芸品が輸入されてきました。そのうちの堆朱（ついしゅ）、堆黒（ついこく）といった彫漆品の影響を受け、仏像を作る仏師や、神社や寺作りをする宮大工たちが、木の器に彫刻を施し、漆をぬり重ねたのが始まりです。はじめの頃は、禅宗の寺院で香を入れるのに使う大きな香合等が主に作られていました。室町時代の末頃には、茶の湯が盛んになるのと同時に、茶道具として広まっていきました。鎌倉彫の生活用品が見られるようになるのは、明治時代に入ってからです。

【特徴】

独特の彫り技術によって表現される力強く大胆な彫刻模様と、マコモ墨という墨を朱色の漆に蒔き付け、彫刻の立体感を強調する方法は、他の漆器に見られない鎌倉彫の大きな特徴となっています。



真壁石燈籠

主な産地：茨城県

【産地組合】真壁石材協同組合／茨城県桜川市真壁郡真壁町真壁402 TEL:0296-55-2535



【歴史】

茨城県真壁地方は、質の良い花崗岩（かこうがん）が採れることから、古くから石を生活用具として加工、利用してきました。この地方の石材業の起こりは、室町時代末期に真壁町長岡地域一帯で始められた仏石作りであると伝えられています。真壁石燈籠として確認できるものとしては、真壁町の寺院境内にある、文政7年（1824年）に製造されたものが最も古いとされており、これを作った石工によって技術・技法が確立されました。

【特徴】

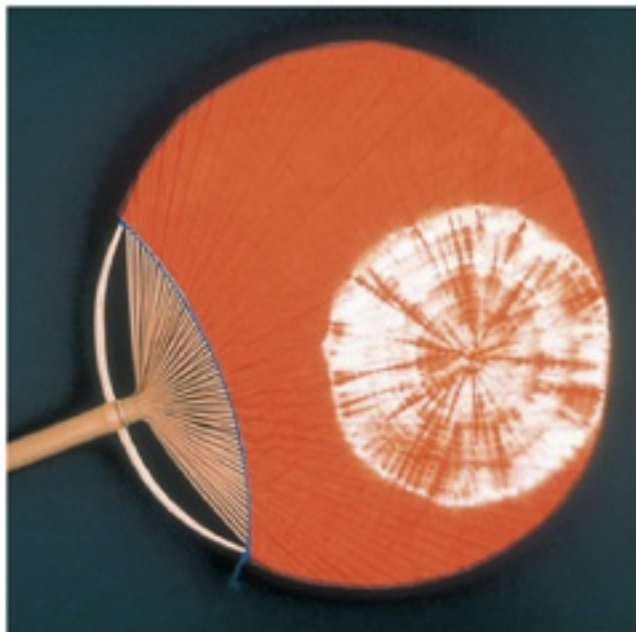
硬白度の色調を持つ真壁石燈籠は、柔らかさのある、繊細優美な彫刻が特徴で、しかも重量感があります。苔が付くことにより、一段とその特徴が生かされ、日本庭園等に一層の優雅さと趣きを与えます。



房州うちわ

主な産地：千葉県

【産地組合】房州うちわ振興協議会／千葉県館山市館山1564-1 館山市役所 経済観光部商工観光課内 TEL:0470-22-3362



【歴史】

関東でうちわ作りが始ったのは江戸時代です。当時房州はうちわの材料となる竹の産地でした。房州でのうちわ作りは明治10年ごろからといわれており、明治17年（1884年）には安房郡の一大物産として生産されていたとのことです。京うちわ、丸亀うちわとともに日本三大うちわのひとつとして、房州で受け継がれています。

【特徴】

良質の女竹を骨部分に、真竹を弓部分に使用し、京うちわの差柄、丸亀うちわの平柄に対して、丸柄であること、丈夫で半円の格子模様が美しいうちわです。



益子焼

主な産地：栃木県

【産地組合】益子焼協同組合／栃木県芳賀郡益子町益子4352-2 TEL:0285-72-3107



【歴史】

19世紀の中頃、笠間焼の影響を受けて始まりました。初期の益子焼は、藩の援助を受けて日用品を焼いており、そうして作られたものは江戸の台所で使われていました。大正13年から作家活動を始めた浜田庄司は益子に住む陶工達に大きな影響を与えました。そこから、現在、益子焼として親しまれている食卓用品や花を生ける器等が作られるようになりました。益子の良質な陶土を使って、白化粧、刷毛目（はけめ）等の伝統的な技法で力強い作品が大量に作り出されています。

【特徴】

伝統的な土地の素材である益子でとれる陶土と、釉薬（ゆうやく）等の技術が結び付いて生まれた、落ち着いた艶のある素朴な焼き物です。



伊勢崎緋

主な産地：群馬県

【産地組合】伊勢崎織物工業組合／群馬県伊勢崎市曲輪町31-1 TEL:0270-25-2700



【歴史】

伊勢崎緋の歴史は古代にまで遡ることができますが、産地が形づくられたのは17世紀後半になってからです。明治、大正、昭和にかけて「伊勢崎銘仙（いせさきめいせん）」とよばれて全国的に知られていました。伊勢崎緋の特色は括（く）り緋、板締（いたじめ）緋、捺染（なっせん）加工の技法にあります。単純な緋柄から精密な緋模様まで、絹の風合いを生かした手作りの緋として、色々なものが作られています。

【特徴】

手作業を中心に数多くの工程を経て製作されているので、作品にかかわる職人によって、同じ柄の作品でも出来上がりはそれぞれ微妙に違います。



桐生織

主な産地：群馬県

【産地組合】桐生織物協同組合／群馬県桐生市永楽町5-1 TEL:0277-43-7171



【歴史】

1300年ほど昔、宮中に仕える白滝姫が桐生の山田家に嫁に来て、村人に養蚕や機（はた）織りを伝えたのが始まりと言われています。鎌倉時代末の新田義貞の旗揚げや、1600年の関ヶ原の合戦では、徳川家康が桐生の白絹（しらぎぬ）の旗を用いたこと等から、桐生織物はその名を全国的に高めました。さらに19世紀前半には幕府の保護もあって、金襴緞子（きんらんどんす）や糸錦（いとにしき）のような高級織物を生産するようになり、この技術・技法は今の桐生織に引き継がれています。

【特徴】

桐生織は品種が多く、生産の量の少ない付加価値の高い先染めジャカード織物です。いずれもセンスの良いデザインや紋様で作られています。

岩槻人形

主な産地：埼玉県

【産地組合】岩槻人形協同組合／埼玉県さいたま市岩槻区本町5-6-44 商工会館内 TEL:048-757-8881



【歴史】

江戸時代後期の雛祭りや端午の節句は、大切に賑やかな行事であり、そこで大きな役割を果たしたのが人形です。岩槻人形は、その江戸時代後期から始まり、明治初期には、農閑期に地雛細工人が作っていた節句人形と、士族が内職的に作っていた人形の技術が合流してできたとされる雛人形が、本格的に岩槻で製造され、主に関東を中心に商われ、伝統を伝える人形の重要な供給源となりました。さらに、明治時代には、五月人形等の岩槻人形は生産拡大の一途を辿り、国内有数の産地並びに江戸時代の面影を伝える貴重な人形の産地に発展しました。

【特徴】

岩槻人形は、頭を取り付ける胴が大振りで、頭の輪郭も丸く、造作もはっきりとしたもの(目が大きく少し派手目な彩色)が多いのが特徴です。



開催内容

伝統的工芸品の
展示

職人による
伝統的工芸品の
製作実演

来場者による
簡易な関連製品の
製作体験

人間国宝 増村紀一郎氏 講演会



11/9(金) 14:00~16:00 □会場：ふれあいキューブ 4階

増村紀一郎氏プロフィール

昭和16年12月1日生まれ。漆芸家の父、益城(ましき)氏の長男として東京都豊島区に生まれる。東京藝術大学大学院を修了し、平成9年東京藝術大学美術部教授へ就任するとともに、正倉院宝物「御袈裟箱(おんけさのほこ)」第一号を復元する。平成14年には紫綬褒章を受章し、平成20年に「きゅう漆」の分野で親子2代にわたり、重要無形文化財保持者(人間国宝)に認定される。春日部市に20数年在住し、きゅう漆はもちろん、市の芸術文化の振興に多大なる尽力をしている。平成20年10月1日に春日部市市民栄誉賞を受賞。

「きゅう漆」とは…漆塗りを主とする漆芸技法で、素地の材料選択、下地工程を経て、上塗り、仕上げ工程へ至る幅広い領域にわたり、漆芸の根幹となる重要な技法。

同時開催

産地によるギャラリートーク講演 □会場：ふれあいキューブ 1階

11/10(土)
11:00~12:00
山梨印章店協同組合
甲州手彫印章
〈講演者名〉
組合理事長 伝統工芸士
佐野 武彦氏

14:00~15:00
東京伝統木版画工芸協同組合
江戸木版画
〈講演者名〉
理事長
高橋 由貴子氏(予定)

11/11(日)
11:00~12:00
東京都工芸染色協同組合
東京手描友禅
〈講演者名〉
伝統工芸士会会長
飯島 武文氏

産地工芸品
ギャラリートーク
講演は、都合により
日時が入れ替わる
事があります

会場案内

東部地域振興ふれあい拠点施設

**ふれあい
キューブ**
(多目的ホール)

〒344-0064

春日部市南1-1-7

東武伊勢崎線・野田線

「春日部駅」から徒歩5分





伝統的工芸品とは

一般の「伝統工芸」などの呼び方とは別に、「伝統的工芸品」という呼称は、「伝統的工芸品産業の振興に関する法律（伝産法）」で定められました。「的」とは、「工芸品の特長となっている原材料や技術・技法の主要な部分が今日まで継承されていて、さらに、その持ち味を維持しながらも、産業環境に適するように改良を加えたり、時代の需要に即した製品作りがされている工芸品」というほどの意味です。